



## 統合失調症を患う母とともに生きる子ども

### ～ゆりの日常～



松岡園子

#### 1993年のカーネーション-12歳-

ゆりにとっての台所は、祖母がおいしい料理を作ってくれる、家の中でいちばん好きな場所だった。色で言うと、カスタードクリーム色だな、とゆりは幼い時から考えていた。台所の漆喰壁もダイヤル式の電話も、その色だ。それに、お菓子の焼ける甘い匂いや家族の笑い声が集まる場所だということが、その色らしさを際立たせていた。

祖父と祖母は、自宅で50名ほどの小中学生に英語教室を開いている母・夏子の代わりにゆりを育て、日曜大工でも料理でも裁縫でも、ゆりに手伝わせた。ゆりが生まれてすぐに父と母は離婚したらしい。物心ついた時から祖父と祖母、夏子との4人家族でいることが当たり前で、ゆりは父がいないことを特に意識したことはなかった。意識する時といえば、友達になんでお父さんいないの? と聞かれ、「りこんした」と答えた時に、友達の表情が一変し、真剣極まりない様子で、「聞いてごめん……」と言われる時ぐらいだった。それでもゆりは、「別に謝らなくていいよ、悪くないよお」と父のいないことを全く気にすることはなかった。

ゆりが小学6年生になった1993年の春休み前に祖母が入院し、夏子との2人暮らしになった。祖父はその1年前に亡くなった。春休みのある日、台所の椅子に腰かけている夏子に、今日はクッキーを焼いておばあちゃんのお見舞いに行こうと言いかけたゆりは、いつもの台所の色とは違う雰囲気を感じ、言葉を引っ込めた。

「死ぬ……」

「……えっ」

「生まれますよおーに一……」

「お母ちゃん……?」

返事はない。夏子の目の前には、ゆりしかいない。しかし、夏子が話している相手はゆりではない。では夏子は、誰と話しているのか。腕のあたりを急に誰かにつかまれた時のように、ぞくっとした。ゆりにとって目の前にいる自分のことを見えていないように振舞う夏子は、異世界の人のように感じられ、それ以上、話しかけるのがためらわれた。小学校を卒業したばかりの心弾む解放感は一気に崩れ去り、以前と同じ台所なのに、灰色にうす霏がかかったように暗転した。ゆりは、自分がこの世から消えたのか、夏子が自分には見えない人と話しているのかのどちらかであるが、それが、そのどちらなのかということをしばらく思案していた。

春休みに入った頃、家にいる時だけだった見えない相手との対話が、外でもなされるようになったことで、ゆりは夏子が見えない相手と話しているのだと確信した。ゆりは自分の机の引き出しからそうっと日記帳にしているピンク色のノートを取り出すと、その様子を書き留めた。

**つい、この前からなんだけど、お母ちゃんのようにずがおかしいの……。なんか、いつも1人になると、ひとりごとと言ってるの……。関係のないことを人のせいにしてたり……。なんでだろー。どうやったら治るのかなぁ〜?**

ゆりにとっては残るひとりの頼みの綱である夏子が一日中、じっとして独り言をつぶやき、仕事もせず家事もできなくなった。毎日のご飯も洗濯された着替えも、なにもない。幸い、祖母がゆりに料理や洗濯の仕方を仕込んでおいてくれたため、毎日のことはギリギリのところまでまわっていた。

夏子の様子は怖いと思ったが、直接危害を加えられたりするわけではない。今まで一緒に暮らしてきた、しっかり者の母が、一体どうなってしまったんだろうと、12歳のゆりにはわからないことだらけだった。

祖母に訊ねてみようと思った時にはもう遅かった。入院中の祖母は、初めは気丈な様子で入院したが、抗がん剤治療を始めて次第に弱っていき、会話ができなくなっていた。その頃から、夏子の姉である亜紀がお見舞いにやって来たり、ゆりの家へ出入りするようになった。ゆりは、夏子のことを亜紀に訊ねてみることにした。

「あの……お母ちゃんが……独り言をいう時があるんやけど」

亜紀は一瞬、口ごもり、

「……ああ……病気……やねん」

と言ったが、それ以上そのことに触れず、慌ただしく話を変えた。

「まあ、夏子の方は気にせんと放つとき。それより、母さんの通帳とか実印、どこに置

「いてるか、わかる？」

夏子の様子は明らかにいつもと違うのに、家を訪れる大人は、まるで夏子が透明人間になったかのようにその様子について触れず、相手にしないのはなぜなのか。そう思いながらゆりは、見てはいけない大人の世界を見てしまったように感じた。

暫くして、ゆりの家を売却する話や、祖母の貯金がいくらあったかなど話が親戚の間で頻繁にされるようになった。春休みも半ばに差し掛かった頃、亜紀と夫の良二は、祖母を神戸から奈良の病院に転院させ、同時に、ゆりと夏子を奈良にある自分達の家へ引き取った。その家には、亜紀、良二と高校生の美奈、弟の直が住んでいた。ゆりは夏子と二人で、家の一室を貸してもらった。

ゆりは絵が上手な、憧れの従姉<sup>いとこ</sup>である美奈と同じ屋根の下でしばらく一緒にいることになったが、昔のように打ち解けて話す気にはなれなかった。急に奈良へ行くことになり、納得のできていなかったゆりは、亜紀や良二に反抗的な態度をとっていた。その手前、美奈にだけ愛想よく振舞うことはゆりの意地が許さなかった。美奈は朝からおしゃれに入念で、台所の湯沸かし器のお湯を使い、朝シャンをしてから、ふんわりと花の香りを漂わせて制服姿で出かけていく。

「美奈ちゃん、やっぱりお洒落やなあ。綺麗やし」

ゆりにとって、美奈は憧れのお姉さんだ。でも、美奈と同じように朝シャンをしたいなんて、居候している立場でとても言えない。ゆりはこの家の中で小さくなっていてはならないことに、窮屈さを感じ始めていた。

奈良の病院へ転院して1週間ほど経った4月初旬の朝、祖母が亡くなったと電話で告げられた。日に日に弱っていく祖母を見ていて、ゆりは祖母の死を予期したこともあったが、回復への一縷の望みをかけて転院先の奈良に来たのだった。お通夜が始まるまでもその後の葬儀も慌ただしく、別れを悲しんでいる間もないほど、親戚の相手やお茶出しと、息つく間もなく3日ほど過ぎた。

人の一生は、あっけなく終わる。家を守っている人間が弱ったりいなくなると、他の人が家にどんどん入りこんできて、その家族がそれまで積み上げてきたものを、めちゃくちゃにしてしまう、とゆりは思った。祖母の葬儀後、そのまま亜紀の家で住むか、元の家に戻るのかと思っていたゆりがその後には告げられたのは、思ってもみなかった場所だった。

「この間うちに遊びに来てた、美奈の友達のおふちゃん、ゆりちゃんも会ったでしょ？ あの子、あおば園で育ったのよ。すごく良いところだね、『あおばで良かったあ』って言ってたんよ。おばちゃんもそう思うわあ。今高2やけど、看護師目指して頑張ってるね。それでゆりちゃんも、あおば園やったらいいかなって、おじちゃんと言ってたんよお」  
伯母の亜紀が、覚えたセリフを流すようにゆりに告げたが、無理に作り笑いをしている

せ

いか、変に声が上ずっている。

「え……」

ゆりは耳を疑った。何を言われているのかがわからない。それでゆりちゃんも、あおば園やったらってどういう意味…?

どうやら、あおば園というところで美奈ちゃんの友達が育ったため、ゆりもそこで暮らしたらどうか、ということになったらしい。

「そんなん……お母ちゃんはどうするの?」

「夏子はしばらくおばちゃんの家にいるわ。入院が必要かもしれへんし」

入院……? なんで……?

「ほんまにお母ちゃん病気なん? 動いたり話したりできるやんか……神戸に帰る。お母ちゃんと神戸に帰ることはできへんの?」

「夏子と2人、あんたらを帰したら……。それは心配で、今はそんなことさせられへんわ。おじちゃんがあおば園に行けるように何回か相談に行って、今日、手続きしてくれてるから、そうしたらそこから中学校へも行けるし、な」

なんで、なんで。

「嫌や。そんなん、お母ちゃんがおるのに……。じゃあ、ここから中学校に通うんは?」

「それもちょっと難しいんよ。直もまだ3歳で手がかかるしな。な、明日から」

「そんな……。それやったら、お母ちゃんと一緒に神戸で暮らした方がましや!」

ゆりはそう言いながらくると向きを変え、借りている部屋に戻ろうと廊下を目指した。なにそれ、なんでそんなとこに行かなあかんの……。

追い打ちをかけるように口の達者になってきた直が、戦隊もののお面を被り、おもちゃの剣を手に、ゆりに体当たりしてきた。

「もう、ゆりちゃん、あおばえん、いけー!!」

「……」

いつもなら直の相手をして悪役になってやるゆりだったが、この時ばかりは、そんな気分になれない。

「なんでもかんでも大人で勝手に決めて……。それに、なんで直くんが“あおば園”って言葉、知ってるんよ……」

こんなに小さい子にまで……と思うと、情けなくて涙が溢れてきた。ゆりのいないところで、大人同士の会話の中で、勝手に色々なことが決められていく。でもゆりは、何でも大人の言うことに反発ばかりしている自分の考えが常識外れなのかもしれないと、少し弱気になりながら、ふらふらと部屋の引き戸を開けた。そして部屋の奥で三つ折りにして積んであった敷き布団にうつ伏せに倒れこんだ。

「ゆり、どうしたん」

ゆりが布団に倒れこむと、布団の横でじっと正座をしていた夏子が、そっと背中に手を置いた。暫くするとまた、ぼそぼそ誰かと話している声が聞こえてくる。奈良に来てからも、亜紀に言われた手伝いをしながら途中で動きが止まり、独り言をつぶやくことはゆりの目の前で何度もあった。

「このお母ちゃんがなんで入院なんよ。別に、誰かと話してるだけやんか」

最初、夏子の異変に気付いた時には恐怖におののいたゆりであったが、今となってはそれが日常の風景であり、さして問題視するほどのことではなくなってきていた。

布団にうつ伏せになりながら、ゆりは泣き疲れてウトウトと眠ってしまったようで、亜紀と美奈の激しく争う声で目が覚めた。窓の外を見ると日は落ちかけて、手首にはめた腕時計は6時をまわったところだった。起き上がった途端、鼻の奥がツンとして、泣きすぎた時のしゃくりあげるのと同じ息づかいが、また思い出したように胸をひくひくさせた。

「あっ、そうやった、あお婆の……」

さっきの亜紀とのやり取りが思い出されて、気が重い。奥の部屋では、亜紀と美奈が何かを言い合っている。

「美奈ちゃんがこんなに大きな声で怒るなんて。何かあったのかな」

ゆりは、音がしないようにそうっと部屋の引き戸を左にずらし、その隙間に耳を近づけた。泣いているような美奈と甲高い亜紀の声がする。

「そう言うてもな、明日からゆりちゃんは、ふうちゃんが住んでた、あお婆園に行くって決まったんやから。会いたかったらまた会いに行けるし」

「なんで？ ゆりちゃんが、かわいそうやんか！」

美奈ちゃんは、わかってくれている。美奈ちゃんがそう言ってくれているから、おじちゃんとお婆ちゃんは、あお婆園に行くことを考え直してくれるかもしれないという少しの期待がゆりの心の中に灯った。

「やっぱり、おかしいよね……」

子どもはおかしいと思うんだ。でも、やっぱり大人の意見が通るのかな。だけど、美奈ちゃんだけでもわかってくれて味方してくれたのが、救いだとゆりは思った。あまりに平然とあお婆園に行くことを言われたため、ゆりは「行きたくないと言う私の方がおかしいのかもしれない」と思いかけていたが、美奈の声を聞いてもう一度、気を取り直した。

子どもだからという理由で、できないと思われることや通らない意見があって、いくら力をこめて伝えても、それ以上に大きな力が、それが正しいことであるかのように大人たちの間で了解済みであることに、ゆりの大人への不信感は膨らんでいった。

その夜、台所では亜紀と良二がふたりで話をしていた。

「ゆりちゃんが、あお婆に行くの嫌やって。夏子とここで一緒に暮らされへんのやったら、神戸に帰った方がましやって言って、えらい泣いて」

亜紀が、洗濯物を畳む手を止めて切り出すと、良二はお茶をすすりながら顔をしかめた。「嫌やって言ってもなあ……他に何か方法あるんか。あの子のためや。あの子の言うとおりにして、もし何かあったらどうするんや。今日行った児童相談所でも、そんな事言っとったぞ。」

「ゆりちゃんは、まだ夏子の病気のこと知らんし。事情が理解できんのと違うやろか。急に施設に行くなんて」

「親が病気で子育てができんから、施設が家庭の代わりになって子どもを預かるそうや。今のあの状態で、2人で生活できると思うか？何か起きて、新聞沙汰にでもなったら、それこそ大変やぞ」

「でも、美奈にもゆりちゃんが可哀想やって言われて……。確かに可哀想かもしれへんとも思うんよ」

「まあ最初は誰でもそうやろ。せっかく、色んな人が動いてくれてるんや。そのうち慣れてくると違うか。ここで甘い顔見せたら、あの子も後ろ髪ひかれて、よう行かんて」  
亜紀はそれ以上何も言わず、ふうと溜息をつきながら、横の部屋で寝ている直の布団を掛

け直した。

明るく朝、ゆりは早めに目が覚めた。隣で寝ている夏子の寝顔をそっと見ていると、こうして隣にいられるのも、今日が最後なのか……と思うと胸が押しつぶされそうになった。今日から全く知らないところへ行って、ずっとそこで寝泊まりして生活する。そんなに簡単にあちこち行って、言われるままになって、と思うといたたまれなくなり、ゆりは気付くと、台所で慌ただしく朝ごはんの支度をしている亜紀と、新聞を読んでいる良二の横に立っていた。昨日同じこと言ったのにも関わらず、ひとつも言い分を聞き入れてもらえなかったためか、声が震えて出にくい。

「やっぱり……私のお母さんは、ちゃんというから。神戸に帰る」

「……ゆりちゃん、いくら言っても、もう変わらないんよ。今日3時にあおば園に行きますって言ってあるから、午前中に持ってきた荷物をまとめてね。おじちゃんが車で送ってくから。それから、これ、あおば園から行く中学校の制服。おばちゃんの友達の子どもさんからお古もらったから、これ着てみて」

「……」

亜紀の差し出した紙袋には、クリーニングの透明袋に包まれた白いセーラー服と紺色のプリーツスカートが入っていた。セーラー服には憧れていたが、こんな形で着ることになるとは思わなかった。ゆりは祖母を亡くしたばかりで、悲しみに暮れているところに母の夏子まで取り上げられて、1人ぼっちになったような気分になった。

あおば園へ向かう道中、良二の運転する車の窓から満開の桜を眺めながら、ゆりは隣に

座っている夏子の横顔を見ていた。夏子はゆりの視線に気付くと、にこっと微笑むが、心ここに在らずという感じで、時々ぼそぼそと誰かと話している声が聞こえる。

あおば園に着き、事務所で児童相談所の担当者と、あおば園の職員・山田お兄さん、夏子、亜紀、良二が話をしていると、20代ぐらいのエプロン姿のお姉さんが「迎えにきました。行きましょうか」と言って入ってきた。

「男子と女子の棟が別々で、小学生から中学生までの子どもが1つの棟で生活をしているのよ」

ゆりは事務所を出てお姉さんの説明を受けながら、ぱんぱんに荷物を詰め込んだ大きな旅行カバン2つを持ち、一番奥の棟へ案内された。その建物に入ると、赤いランドセルを背負った小学2,3年生ぐらいの女の子が「お母さーん、ただいまぁ」と言いながら駆け寄ってきた。

「お母さん……?」

「あっそうそう、これからは、私たちエプロンをした人みんなを、“お母さん”って呼んでほしいの。みんなそうしているから」

「へ?」

ゆりは、何を言われているのかがしばらくわからなかった。これからは寮母さんを「お母さん」と呼んでと言われたのだった。ゆりは、私にとってのお母さんは1人しかいない、今日会ったばかりの人を、いきなり「お母さん」なんて呼べない、お母さんは他にちゃんといると思った。お母さんがいるのに、なぜここにいないてはいけないのか? 自分がこの場所にいるということに、納得ができない。

「お母さん」と30分ほどあおば園の中をまわった後、ゆりは最後に食堂の隣の部屋へ案内された。

「愛、今日から一緒の部屋になる中1の吉田ゆりちゃん。色々教えてあげてね」

「ああ、うーん……」

ゆりは、荷物を床に下ろすと、愛と呼ばれた同室の子が何か話しかけてきてくれるのかと思ったが、愛はゆりの方をちらりとも見ない。しんとした時間だけが流れる。部屋の奥にあるハンガーフックには、今朝、亜紀にもらったのと同じセーラー服がかけられ、胸のところに「Ⅲ・2」「川上」という学年章と名札がついている。ドアの向こうでは、さっき案内された食堂の方向から「お母さん」が誰かに向かって「ちょっと一、手伝ってえ」と呼ぶ声が響いてくる。ゆりは勇気を出して、寝転んでマンガを読んでいる愛に話しかけてみた。

「あの……『魔女の宅急便』とか、好きですか？ 私、好きで本を持ってきたんですけど」  
「ああ……」

ゆりは見上げられた視線に、一瞬たじろいだ。鋭いような冷たいような。睨まれているようにも見える。

「私、何か悪いことしたかな……」

頭から血の気が引いていく。胸の鼓動が手先にまで伝わり、こめかみのあたりが汗ばむ。ゆりは「これ……」と言いながら、『魔女の宅急便』のフィルムコミックスを愛に差し出した。愛は「ふーん」と言いながら、差し出された本を部屋の半分より奥の方にたぐり寄せた。部屋はきっちりと半分こなのかな……。それとも、そんなことは気にしなくても良いのか。ゆりは部屋を真っ二つに分ける見えない線を引いてみて、部屋の真ん中に下ろした自分の荷物を、それよりも手前に引っ張った。何かぎこちなさを感じた。

その日は同じ棟の10人の子どもと「お母さん」2人で夕食の準備、お風呂などを済ませ、あっという間に夜になったように感じた。今日1日の出来事を思い出すと、疲れているはずなのになかなか眠れない。

「なんで、ここに来たんやろう」

ここには「お母さん」がいて、手作りのご飯も食べられて、お風呂も沸いていて。今の夏子にはできないことが沢山あるんだろう。だけど、完璧な「お母さん」達と食べるご飯よりも、ぼそぼそと独り言をつぶやく夏子と食べるカップラーメンの方が良い。お風呂だって自分で沸かせるし……。

「なんで、ここに来たんやろう」

ゆりは頭から布団をかぶり、静かに涙を流した。泣きたい時は泣けばいいんだ、スッキリするからと聞いたことがあるが、スッキリするどころか息苦しい。「ぐすん」という音が漏れると、愛に泣いていると気付かれてしまうため、口で息をして唾を飲み込み、静かに涙だけを布団のシーツに押し付けた。

窓の外から明るさを感じるようになった頃、オルゴールの音楽が棟内に流れてきた。枕元に置いた腕時計を見ると、6時を指している。ゆりはそのメロディーには聞き覚えがなかったが、オルゴールの音色の余韻が自分の宿命を表しているようで、切なくなってきた。メロディーを耳で追っていて、ふと気付くと布団の中でうずくまり、涙でできたしみが枕に広がっていた。

愛が布団から起き出して、部屋を出て行った。廊下が騒がしくなってくる。ゆりも身支度をととのえ、朝ごはんの準備を皆で行うために、部屋を出て食堂へ向かった。年下の、小学生の子どもたちが、

「ゆり姉ちゃーん、いっしょに歯磨き行こ」

「ゆり姉ちゃん、お部屋に来てー」



と、駆け寄ってきた。“姉ちゃん”と呼ばれると、それまで一人っ子だったゆりにはたくさんの妹ができたみたいで、くすぐったいような、照れくさいような気分になった。学校へ行く時間が近づき、あおば園の門の前で整列したゆりは、愛と制服を着た男子達のいる列の一番後ろに並んだ。

「お母ちゃんはどうなったんだろう」

中学校までの道のりを、愛と男子達がふざけ合って歩く間、話し相手のいないゆりは夏子のことばかり考えてしまう。

中学校に着くと、まず職員室に向かうようにと聞いていた。4月も後半に差し掛かるところで中学校の入学式はすでに済んでおり、ゆりは中1の転入生としてクラスで紹介された。中学校で挨拶を済ませ休み時間になると、クラスの女子7、8人が「何て呼んだらいい?」「部活、何入るの?」「学校を案内してあげる」と言いながら、ゆりの周りに集まってきた。ショートカットで細身の千紗はくりっとした目を輝かせ、立て続けに話しかけてくる。

「ねえ、今度の日曜日、遊べる? ゆりちゃんの家遊びに行ってもいい?」

「うちな……あおば園にいるねん。だから、遊びに来てもらうことはできんかも。でも、私が遊びに行ってもいいかどうか、訊いてみる」

「えー、どこか行くんも訊かなあかんの。おとろしいなあ」

「おとろしい……? それなに? 怖いっていうこと?」

「ははっ、めんどくさいっていう意味。あっそうか、これ奈良の方言? 神戸の方言ってあるん?」

「へえ、そうなんや。神戸は……遊んどおとか、食べとおとか、“してる”の意味で“とお”って使うかな」

「へえー、おもしろいな。あっ、沖谷ちゃんが呼ん“どお”、とか?」

そう言いながら、千紗が指さした方を見ると、教室の前のドアから担任の沖谷先生が、次の授業の道具を持って現れた。

給食の時間、千紗に同室の川上さんのことを話すと、

「えーっ、あの川上さんと同じ部屋なん!?! 3年生の中でもちょっと怖いほうかなあ。なんか言われても、気にしやんときいよー」

中学校に入学したばかりなのに、千紗はどこからそんな情報を集めてくるのかと思う程、学校内の色々なことを知っていて、あれやこれやとゆりに教えてくれた。子どもだけの世界ってなんだか、ほっとするなあゆりは思った。

給食が終わり、5時間目、6時間目と下校時刻が近づくにつれて、ゆりの体はこわばってくる。あおば園に帰らなければいけない。当たり前なことだけど、クラスの皆は自分の家

に帰る。6時間目の終わりを知らせるチャイムが鳴った。

「親戚の家も近いのに、私はあおば園に帰るのか……」

ゆりが見ていた窓の外に青空に、ぼんやりと夏子の笑顔が思い浮かび、鼻の奥がツーンとして、慌てて教科書をカバンに詰めた。

お母ちゃんは、まだ亜紀おばちゃんの家にいるのかな……入院したのかな？

わからないことが多すぎて、胸がざわざわしたまま落ちつかない。

5月の第2土曜日は母の日。中学校の帰りを通る商店街のあちこちでは、母の日のPOPがカラフルに店頭を彩り始めていた。ケーキ屋さんの前のワゴンは、“毎日頑張ってくれているお母さんにごほうびを”という文字で飾られ、焼き菓子の詰め合わせには1つひとつカーネーションの造花が添えられている。お母さん……って何よ、と心の中で呟いたゆりの頭の中には、複数のお母さんの顔が思い浮かび、それぞれに対して「毎日頑張ってくれているお母さん」という言葉が当てはまるかどうか確かめてみた。去年の母の日にゆりは、お小遣いを貯めて買ったカーネーションの鉢植えを夏子に贈った。夏子はそれを大切に、「カーネーションはデリケートなのよ、1日でも長持ちするように」と言って、本で調べた手入れ法を欠かさず、玄関先に飾ってくれていた。今年の母の日にごほうびをあげたいお母さんは、誰なんだろう。お母さんって、そんなに簡単に置き換えるもの？

次の瞬間、アーケードが一旦途切れる信号の手前にある花屋さんから、大きなPOPの言葉がゆりの目に飛び込んできた。

“お母さんがいなくなったら、わたしもいない”

……そう、やっぱり……お母ちゃんがいなくなったら、私も……どこにもいない。

たちまち視界がぼやけ、大粒の涙がポタ、ポタと頬を伝って足元に落ちた。

ゆりは、歩いてきた方向にくるりと向きを変えて、商店街を早足で歩きだした。商店街を抜けきった所に、大きな神殿がある。ゆりは、その神殿の周りにある廊下を備え付けの雑巾で拭くことにした。あおば園に帰りたくない。でも行く場所がない。

「お母ちゃんと神戸の家に帰りたい……」

何度も心の中で祈りながら、廊下を拭き続けた。

ゆりはそれから毎日、中学校の帰りになると、神殿の方へ足を向けた。そして、ただただ廊下を拭いていた。そのうち、毎日、制服姿で膝をついて拭き掃除をしていたため、ひざが擦りむけて、ヒリヒリ痛むようになった。膝を見つめているゆりの姿を見て、同じように廊下拭きをしていた年配の女性が、びっくりした様子で近づいてきた。

「あらあー、あんた、真っ赤やないの。これあげるわ。返さなくていいから」

ゆりが女性の手許を見ると、タオルとゴム紐で手作りしたような、ピンク色の膝当てが目の前に差し出されていた。

「ありがとうございます」

ゆりは、膝当ての他にも何かをもらった気がした。

「そんなに一生懸命して、何かお願いごとでもあるの？」

「え……はい」

夏子の顔が思い浮かんだが、どこから話せばよいのかわからなくなり、ゆりはにこっと微笑むだけにした。そして膝当てをつけさせてもらい、また廊下拭きを続けた。ふわふわとした膝の感触、ごつごつした廊下の木目、やわらかな陽の光と春の風、お母ちゃんは、どうしているのかな……。

あおば園に帰ると、また重苦しい気分になる。

「私の帰る場所は、ここではない。ここにいるのは、どうしても嫌」

日に日にそうした気持ちがゆりの中で膨らんでいった。

5月3日。ゴールデンウィーク初日。

「今日は大和高原に行くからねー」

「お母さん」達が小学生の子どもたちに話すのを聞きながら、ゆりは朝からそわそわして落ち着かない。大和高原に行ってから、心はどこかよそに行ったままだった。

あおば園に帰ると、お昼過ぎだった。お昼ご飯の洗い物を皆で済ませると、ゆりは「お母さん」の横へ駆け寄り、まっすぐな目をして切り出した。

「友達と中学校で約束しているから、行ってきたいの。渡したいものがあるって言ってて」

「えっ、でも今日、祝日でしょ。」

「その子、部活で学校に来てるから。もらったらすぐ帰る」

ゆりは「お母さん」が一瞬、眉間の間に皺をよせたのに気付いたが、できるだけ軽く、そう告げた。

「……じゃあ、もらったらすぐに帰って来て」

「はい」

ゆりは、あおば園から歩いて30分ほどのところにある駅へ向かった。

「お母ちゃんは、まだ入院していないとしたら、亜紀おばちゃんの家にいるはず。入院していないかどうかは、わからない。でも、亜紀おばちゃんの家に行くと、怒られてあおば園に連れ戻されるだろうな……」

小走りで駅へ向かう。宝塚に住んでいる祖母の友人・真鍋さんの家なら、何回か行ったことがある。そこに行かせてもらえないかと、ゆりは走りながら考えた。電車賃は、隠し持っていたお金で足りる。

ゆりは駅に着いた。切符を買おうとして料金表を見上げていると、誰かに肩をトントン

とたたかれた。

振り向くと、うっすらと笑う山田お兄さんが立っていた。

見つかってしまった……。

「どこに行くの？」

「……友達、……あの」

何とも気まずい沈黙が続いた。やっぱり、怪しまれて後をつけられていた。中学校で待ち合わせだと言って出てきたのに、中学校を素通りして、さらに15分ほど歩いた場所にある駅で切符を買おうとしていた理由なんて、とても説明できない。山田お兄さんは、額ににじませた汗をぬぐうと、にこにこしながら、

「電車に乗って、勝手にどこかに行くことはできないよ」

「……」

そんなこと知っている。でも、こうするしか……。山田お兄さんは、駅の横手に停めてある車までゆりを案内した。そして運転席にどんと腰かけると、ゆりがさっきまで走ってきた道を、あおば園へ向けて逆方向に車を走らせた。さっきまで見てきた景色が飛ぶように巻き戻されていくのをゆりは恨めしそうに眺めた。あおば園まで戻ると、事務所の前で3人の「お母さん」と事務員さん達が、わあっとゆりのもとへ駆け寄ってきた。「勝手なことをしないように」とくぎを刺され、肩を落としたゆりが部屋に戻ると、「脱走しようとした？ふん」と、愛が冷ややかに出迎えた。

5月4日。ゴールデンウィーク2日目。

「よしのがわー」

小学生の子どもたちが朝から嬉しそうに騒ぐのを聞いて、「今日は吉野川なのか」とゆりは思った。昨日のことはまだ懲りていない。でも、昼間はおとなしくしている。吉野川で遊びながらも頭の中でどうすればここから抜け出すことができるのかということ、しきりに考えた。女子棟の横に、共同のお風呂がある棟がある。お風呂は、決められた時間に各自その棟に行くことになっている。1人になれるとしたら、お風呂に行く時か。

吉野川から帰り、夕食を終えて後片付けも終わった。時計を見ると、夜の8時をまわったところだ。

「お風呂に行ってきます」

「お母さん」に告げて、タオルなどお風呂の用意を持って女子棟を出る。ゆりは、言い方がいつもと違って、ぎこちないんじゃないか、ばれるんじゃないかと思って、ひやひやしながら、棟を出て暗い通路を早足で歩いた。前後に誰もいないのを確認して、タイミングを見計らい、そこからサッと横道にそれて、一気に山の坂を駆け下りる。すぐに誰かが追ってくるんじゃないかと、怖くて怖くて、後ろを振り返ることができず、必死で走った。駅まで徒歩30分の距離を、歩いている暇などない。できる限りの力を振り絞って、駅まで

走った。

「ゆりがいなくなった」とあおば園の中で騒ぎになるまでは、時間の問題。昨日、一回失敗している。だから絶対につかまりたくない。でも余計に怖い。昨日と同じことになったら……。追いかけて来られる前に、電車に乗ってしまわないといけない。9時ごろに奈良を出発して、宝塚まで、終電前には着くことができるだろう。駅の明かりが見えてきても、気は抜けない。追っ手が、車で先に駅に向かっているかもしれない。駅に着いて、切符を買い、来ていた電車に飛び乗った。電車が出発するまでは、気が抜けない。追いかけてくるかもしれない。ぼつりぼつりと電車に乗ってくる人が追っ手ではないとわかるまでは、身を縮めて、顔を上げないようにしていた。

しばらくして「早く出発して」と願った電車は出発した。ひとまず、ほっと安堵して力が抜けてへなへなになった。宝塚まで、2時間ぐらいはかかるだろう。着いたら11時をまわるかな。真鍋さん、起きてるかな？ 怒られるかな？

夜の電車は昼の雰囲気とは違って、心細い。大人しかいない。大人が怖く感じる。でもゆりの胸には、自分の安心できる場所に向かっているのだという希望の灯がともりはじめていた。

その頃あおば園では、ゆりがいなくなったと大騒ぎになっていた。異変に気が付いたのは、愛だった。

「ゆりのカバンがなくなってる！」

「どういうこと、ゆりなら、さっきお風呂に行くって……」

「調べて！ お風呂にお出かけカバンなんか、持っていかんやん。ゆりは出かける時、いつも赤いカバンを持ってた。それがなくなってる！」

「お母さん」がお風呂を覗くと、ゆりの姿はどこにもなかった。「ゆーり」と呼んでも返事はない。脱衣所の掛け時計は8時半をまわったところだ。夜の真っ暗な道を、1人でどこに行ってしまったというのか。もし何かあったら……。

「大変！」

「お母さん」はそう言い終わらないうちに、大慌てで事務所へ内線連絡を入れた。

ゆりは宝塚駅に着いた。改札の時計の針は、もうすぐで11時になるところだ。しんとした真っ暗な道に街灯だけがぼつんぼつんと並ぶ道を、記憶を頼りに真鍋さんの家を目指す。

同じような住宅の立ち並ぶ道を慎重に確認しながら、ここだったと思う家の前に着いた。表札を見ると、「真鍋」と書かれている。型板ガラスでできたドアの奥の方から、ぼんやりと明かりが漏れているように見える。ゆりは、おそるおそる玄関のチャイムを鳴らした。暫く待ったが物音ひとつせず、明かりもぼんやりしたままだ。

「こんな時間に……そうやんね」

心臓がどきんどきんと大きく体を揺らす。大変なことをしてしまったのかもしれない。ここだけを目指してやってきた。もし無理だったら……なんて考えなかった。

震える指でもう一度チャイムを鳴らすと、ドアの向こうでごとんと音がしてインターホンから「……ハイ」と小さく低い真鍋さんの声が返ってきた。

「ゆりです」

「ゆり……。……え？ ゆりちゃんか？」

真鍋さんの声が急に大きくはっきりとした。ドアの向こうで騒がしくばたん、ごとんと音を立て、玄関と庭の明かりがぱあっと灯った。

真鍋さんと娘の瞳さんが温かく迎えてくれたことに、ゆりは心底ほっとした。真鍋さんはゆりから事情をきくとすぐに、あおば園の電話番号を尋ねた。

「……なんせ、1回来たかったようですよ。明日にはそちらへ帰るようにします。どお一か、帰った時に怒らんようにしてあげてください」

そう言って、ぺこりぺこりと頭を下げている真鍋さんの横で、瞳さんがゆりに温かい紅茶を淹れてくれた。真鍋さんは電話が終わると、晩御飯は？ 電車賃は？ とゆりに立て続けに訊いた後、

「ゆりちゃんも、こうするしかなかったかもしれへんけどな、たくさんの人に心配をかけてしまったんやから、それは帰ったら謝らなあかんよ。言いたいことがあるんやったら、話し合いをしてもらうことが大事とちゃうか」

そう言いながら、ゆりの寝床をつくってくれた。翌日、約束通りにあおば園へ戻ったゆりは、真鍋さんがお願いしてくれたおかげで叱られることはなかった。ゆりが女子棟に戻ると「お母さん」は、一緒に探してくれていた愛の様子をゆりに伝えた。「愛が、ゆりのカバンがないって教えてくれてね」

ゴールデンウィークは終わった。ゆりは今朝も早くに目が覚めて、6時ぴったりにオルゴールのメロディーが響くのを布団の中で丸くなり聞いていた。完全に覚えてしまったそのメロディーは学校にいる時も耳の奥でよく流れてくる。

「話し合い……」

朝早く教室に着いたゆりは、窓際の席からぼんやりと空を眺めていた。毎日、午前中は、まぶたが水分を含んで重たいのにも、もう慣れた。

「おはよ。連休どっか行った？」

声のする方を振り向くと、千紗と絵美、隣のクラスの涼子が立っている。

「おはよう。うん……じつは……」

深刻になりすぎないように、少し茶化して連休の出来事を話すと、3人は「へえー！」「えー！」と一様に驚いた様子だった。

「なんか大変なんやなあ、ゆりちゃん。うちの悩みとは比べもんにならんわ。でも頑張  
って、お母さんと一緒に暮らせたらいいなあ」

「うん、ありがと。それでな、ちょっと考えてることがあるんやけど。今日な、帰りにお  
ばちゃんのところに行って、話し合いをしてもらおうように頼もうかと思うねん」

「そうやっ、それで思ってること全部言ったら、何か変わるかも！ 頑張れーっ」

千紗が、ぱしぱしとゆりの背中をたたき始めると、絵美と涼子も一緒になってたたき始  
め、最後には4人できやあきやあと笑う声が教室に響いた。

ゆりは帰りの挨拶が終わるとすぐに、駅へ向かった。5 駅向こうまでの切符を買う。亜紀  
の家の場所も、祖母の病院との往復を何度かしているうちに覚えた。あの角をまがると亜  
紀の家だということまで来て、ゆりは一旦呼吸を整えるために立ち止まった。おばちゃ  
んとおじちゃんは、ゴールデンウィーク中の騒動で、あおば園と頻りに連絡を取り合っ  
ていたはずだ。はらわたが煮えくり返るほど怒っているに違いない。怖いな……でも行かな  
いと始まらない。なんて言おうか……でもとにかく頼まないと、と考えているうちに心臓  
がどくどくと音を立て、頭がくらくらしてきた。千紗が「何か変わるかも！」って言っ  
たな。よしっ、勢いで行くしかない。

ゆりが家の前まで足を進めると、玄関先で掃き掃除をして、ふうと腰を反らせた亜紀と  
目が合った。

「……ゆりちゃん！……来たの！」

亜紀の何とも言えない呆れ顔だった。

「お母ちゃんは……？」

とゆりが尋ねている間に、奥の部屋にいる夏子の姿が玄関から見えた。ゆりの視界がた  
ちまちまぼやけていき、あぁーっという泣き声とも叫び声ともとれるような声もれた。夏  
子はゆりのもとへ近づいてくるが、ゆりは安心したのか嬉しいのか、喉の奥がきゅうっと  
狭くなって何も言葉が出ない。ゆりは胸の中で、これまで流れを堰き止めていたものがど  
おっと溢れ出すのを感じた。夏子は、「どう、学校は」と尋ねるが、次の瞬間、「いえいえ」  
と言いながら右手を顔の前で横に振り、誰かと話している様子だ。「お母ちゃんの調子は変  
わっていないんや……」と思ったが、今日はその話をしに来たのではない。ゆりは、ひくひ  
くとしゃくりあげるのを収めるように深呼吸を3, 4回してから、ゆっくりと亜紀に切り出  
した。

「やっぱり、お母ちゃんと離れて暮らすのは嫌や。神戸に帰れるように、もう一度みんな  
で話し合いをしてほしい」

「ゆりちゃん……この間もみんなに迷惑かけて……今日も制服のままこっちに来て……そ  
んな勝手なことばかり」

「だって……誰も、聞いてくれへんやんか！」

「おじちゃんがもうすぐ帰ってくるから、上がって待つといて」

亜紀はそう言い残すと、台所に駆け込んでいった。しばらくすると、「本当に申し訳ありません……はい……はい、車で送っていきますので」と、電話で話しているような声が聞こえてきた。

時計が5時をまわったところで、車庫の方から良二の車らしい、ドアの閉まる音がした。亜紀もその音に気付いた様子で、外に駆け出していった。ゆりは、ふうーっと息を整えた。良二が顔を真っ赤にして玄関から入って来るなり、

「あんたな……この間から……そんな勝手なことばかりするんやったら、誰も面倒見てくれないようになるで！ どうなってもいいんか！」

ゆりは震える両手をしっかりと組み直し、声を振り絞った。

「おじちゃんには……わからへん。他の人も入れて話し合いをしてほしい。そうでないと、またどっかに行くかもしれへん！」

良二の顔がさらにひきつるのがわかったが、ゆりもこれ以上引き下がってたまるかという覚悟の形相で睨み返した。

話し合いの場がもたれたのは、それから4日後の放課後だった。中学校の会議室に担任の沖谷先生と一緒にやってきたゆりは、ロの字に組まれた長机をぐるりと見渡した。夏子、亜紀、良二、あおば園の施設長、あおば園に入所する時について来てくれた児童相談所の担当者が真剣な面持ちで椅子に腰かけている。

「今後、どうしていきましょうか」とあおば園の施設長が切り出した。ゆりは、「お母さんと神戸に帰る」と伝えた。

「お母さんは、どう思われますか？」

児童相談所の担当者が尋ねた。全員の視線と意識が一手に夏子に集中し、次の言葉を待っている。どう思うって……答えは決まっているでしょう。そこに居合わせた大人の誰もが、そう信じて疑わない様子だった。ゆりは、祈るような面持ちで夏子を見つめている。

(ゆりが、嫌がっている……。ゆり本人の意思が一番大事だと思う。)

咄嗟に夏子の口から言葉が出た。

「神戸に……帰ります」

「ちょっと夏子！ そんな簡単に子どもの言うことを聞いて…それでいいと思ってるの！」

それまで押し黙っていた亜紀の叫び声が部屋中に響き渡る。ゆりは、神戸に帰ることができるかもしれないと、希望に瞳を輝かせて夏子の顔を覗き込んだが、夏子とは視線が合わなかった。「え……？ ううん」と誰かにささやいている。あおば園の施設長さんも児童相談所の担当者も難しい顔をしてうつむき、長い沈黙が流れる。こんなにきつい言い方をするおばちゃんだっただろうか……とゆりはそれまでの亜紀の言動を振り返っていた。以前の亜紀おばちゃんは、優しく、時々冗談も言って笑わせてくれるおばちゃんではなかったか。



児童相談所の担当者が困ったような顔つきで、沈黙を破った。

「……もう一度、親戚の方との間でもよく話し合ってみてもらえませんか」

「はい……」

夏子はうつむく。良二は無然とした様子で、腕を組む。

「うーん……2人で生活できるとは思えません。あおば園にいれば、何も心配することはないですし。……子どもの言うことだけで簡単に決められるものでもないですから、少し考えさせてください」

「じゃあ、今日はあおば園に……」

あおば園の施設長がそう言い終わらないうちに、ゆりが言葉を重ねた。

「帰らない！」

その話し合いの結果、どこで暮らすのかが決まるまで、あおば園に籍を置いたまま亜紀の家から中学校へ通うことになった。しかし、ゆりは亜紀の家ではなく夏子と一旦、神戸の家に帰ることにした。

ぱんぱんに荷物を詰めたカバン2つを両手に持ち、ゆりは夏子と神戸に帰ってきた。電車の中でも歩いても夏子はぶつぶつと独りで喋っているが、ゆりには夏子が隣にいるということだけでも十分嬉しく感じられる。駅から家までの道も、一步一步が嬉しくて顔がにやけ、重い荷物を抱えているのも忘れてしまうほどだった。ゆるい坂道を上り角を曲がると、茶色い瓦屋根が見えてきた。

ドアの鍵を開け、ドアがバタンと閉まった。しんと静まり返った玄関、廊下、階段。何も変わっていない。はあーっと溜息がもれた。この家を離れて1か月ほどの間に祖母の死など色々あったのに、その悲しみ、淋しさを癒すことのできる場所がなかった。廊下を祖母が行ったり来たりしていた姿が思い浮かぶ。でも、もう2人でやっていくしかない。ゆりは、それまでびんと張りつめていたものが一気に緩み、とめどなく涙が流れてくるのを感じた。ゆりは夏子に抱きついた。夏子の目からも涙がぼた、ぼたとゆりの額に落ちてくる。

「お母ちゃん……わかるのかな」

ゆりの目の前には、以前のはつらつとした夏子でなく、感情を失ってしまったようにも見える夏子がいる。「でもきっと、大事なことは伝わっている。だって、私と暮らすことを選んでくれたから」

家の中に風を通そうとドアを開け放った時に、ふと庭先を見ると、今年の母の日にゆりが夏子へ贈った、カーネーションの鉢植えが置いてあった。花の姿はなく、緑色の葉っぱだけがこんもりと生い茂っている。夏子は昨年、ひと回り大きな鉢植えにカーネーションの株を移し替え、気温に注意しながら部屋の中に入れたり、外へ出したりしていたのだ。鉢植えは祖母が入院した頃から、軒下に置きっぱなしになっていた。数日、雨の日もあつ

たためか、土は湿り気を帯びている。

「今年の母の日は、色んなことに追われている内に、気が付いたら終わってたわ。すっかり忘れてた」

そう言ってゆりは、カーネーションの鉢植えを台所まで運び、テーブルの真ん中に置いた。

「花が咲いたら、台所が明るくなるかな……」

台所で夏子が座っている椅子の背もたれに手をかけたゆりは、ハッとして鉢植えに見入った。

「あっ、お母ちゃん、つぼみができてる！」

「ああ……ほんと」

夏子の表情はしんどさに参っているようで暗く、目元に力がないように見えたが、カーネーションのことに応えてくれたのが嬉しくて、ゆりはふふふん、と鼻歌交じりでつぼみの膨らみを軽くつまんだ。「つぼみはできて、中身のないことがあるのよ」と昨年、夏子が話していたことを思い出したが、このつぼみは見せかけだけでなく、ちゃんと中身も入っている。

台所に色彩を与えるのは、作られた壁の色でも完璧な母親でもない。このお母ちゃんがいるから、この台所が一番好きな場所になる。カーネーションだってお母ちゃんだって、再び花を咲かせてみせる。

そう思いながらゆりは、これから先に幾重にも連なる話し合いの山々に思いを馳せながら、夏子とともに生きていく覚悟を決めた。

※この物語は実際の体験と、それを探究する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。